

～突撃★ドメーヌ最新情報！！～

◆VCN°26 ドメーヌ・ル・ブリゾー

生産地方：ロワール

新着ワイン5種類♪

VdF キャラクテール 2022 (白)

4年ぶりのリリースとなるキャラクテール！ヴィエーユ・ヴィーニュで収量自体が毎年少なく、加えて霜や病気、害獣の被害などが続き、近年ほとんどブドウが取れていなかった。その苦境の中で2022年は、2018年に次ぐ久々の当たり年となった。この年は太陽に恵まれ、ドメーヌ史上一番ブドウの成長ペースが早かった。フレッシュな辛口タイプのワインが好きなナタリーは、糖度が上がり過ぎないようにブドウの酸が落ちる前に収穫。結果収穫日は9月上旬と例年よりも1ヶ月も早かった。醸造は、フレッシュさを重視し、全てステンレスタンクで仕込んだ。出来上がったワインは、前回販売の2018年同様に上品で透明感があり、薄ウマながらもピュアなエキスが五臓六腑に染み入る優しい味わいに仕上がっている！ちなみに、ドメーヌ白の従来のトップキュヴェは「ル・ブリゾー」だが、近年は収量がほとんど取れず、2022年もブドウが全滅したため、今はキャラクテールが実質的には白のトップキュヴェという位置づけになっている！

VdF ママ・ムシ 2022 (赤)

モルティエの区画にクリスチャン・ショサールが亡くなる直前まで植えた若木のピノドニスだけを使って仕込んだママ・ムシ。キュヴェ名は、元スイスの舞台女優だったナタリーが一番好きな17世紀の劇作家モリエールの劇作「町人貴族 Le bourgeois gentilhomme」の話に出てくる似非トルコ王子 Mama Mouchi (ママ・ムシ)から取っている。町人貴族とは、身分の低い男が貴族の娘と結婚するために、権威あるものが大好きな娘の親を騙してママ・ムシという架空の似非トルコ王子に扮する喜劇で、ナタリー曰く、ママ・ムシのピノドニスはパタポンよりも上のクラスのモルティエの区画だが、樹齢が10数年と若いため、真のモルティエとは言えない「まだモルティエに成り切れていない un arriviste (若造・成り上がり者)」という感じが、劇作のトルコ王子ママ・ムシのキャラクターと重なり、このような名前を付けたとのこと。2022年は、ブドウがかつてないほど早熟の年で、前年よりも収穫が1ヶ月以上早かった。ナタリー曰く、この年は水不足の影響によりブドウのタンニンの含有量が多かったため、マセラシオン期間中はタンニンをなるべく抽出し過ぎないようにルモンタージュもピジャージュも一切行わなかった。出来上がったワインは、チャーミングな果実味とピノドニスのスパイシーさを兼ね備えたピュアな味わいに仕上がっている！彼女曰く、今から飲んでも十分美味しいが、ただ、まだ若いうちはアフターに残るタンニンの収斂がタイトなので、できればあと数年寝かせてほしいとのこと。

VdF コ・テ・クール 2022 (赤)

Côté Cœur (愛する人の傍にいる) という意味の Côté を品種の Côt に掛け、亡きクリスチャン・ショサールのオマージュとしてつくったコ・テ・クール。2021年は、霜により全滅だったため2年ぶりのリリースとなる。また、今回はコーと同じ樹齢のガメイが30%ほどアッサンブラージュされている。ガメイの畑はコーと同じモルティエの区画内にあり、霜などの冷害に弱く、ここ近年はほとんど収量が取れていなかった。だが、前年収量ゼロの反動からか、2022年は30hL/haと豊作だったため、同じ区画内のブドウという理由からコーと同じ日に収穫し、そのままコーに混ぜて仕込んだ。出来上がったワインは、ガメイが入っている分いつもより酒質が滑らかでエレガント！コー主体とは思えない果実の染み入るような優しさとジューシーさがあり、これこそナタリーの醸造センスが光るワインだ！

VdF パタポン 2022 (赤)

ル・ブリゾーのフラッグシップであるパタポン。2022 年は、ブドウがかつてないほど早熟だったのに加えて、日照りによりブドウのタンニンの含有量が多い年だった。醸造は、タンニンをなるべく抽出し過ぎないようにマセラシオン中、ルモンタージュもピジャージュも一切行わなかった。ナタリー曰く、パタポンは以前までミレジムに合わせて長熟向けのロングマセラシオンも取り入れていたが、赤のトップキュヴェにル・トン・デメを据えてからは、ミレジムに関係なく醸造スタイルも完全に果実味重視の方向にシフトしたとのこと。出来上がったワインは、果実味が上品で明るく、酒質がととも滑らか！今飲んでも十分に美味しいが、この年は前年よりもタンニン量が多いので、さらに 1 年～2 年寝かせてアフターの収斂味がもう少しこなれるまで待つのも面白そうだ！

VdF ル・トン・デメ 2022 (赤)

樹齢 100 年のピノドニスからつくるドメーヌのトップキュヴェ ル・トン・デメ！ワイン名は、ナタリーの好きな小説家で今のパートナーの遠い親戚にあたるマリー・ド・エレディアの作品名から取っている。日本語の意味は「好きな季節」だが、ワインはその優しい名前の響きに相応しいエレガントさと、それに相反するようなしっかりとした骨格とストラクチャーのあるところが面白い。2022 年は、日照りにもかかわらず比較的収量に恵まれた年だが、それでも 25hL/ha、ボトルの本数で換算すると 1000 本ほどしか取れなかった。醸造は、パタポンが果実味重視に対しル・トン・デメはストラクチャーとフィネスをコンセプトにしたつくりで、マセラシオン期間も 8 ヶ月と長い。出来上がったワインは、タイトなミネラルの中にフィネスと果実のエレガントさが融合したまさにピノドニスのグランヴァンと言えるような骨格のしっかりとした味わいに仕上がっている！ナタリー曰く、2022 年は当たり年なので、最低 5 年できれば 10 年は寝かせてほしいとのこと！

ミレジム情報

2022 年は、ブドウが早熟で記録的な日照りの中でも比較的収量に恵まれた当たり年だった。冬のスタートは暖冬で雨が多かった。3 月も暖かく、ブドウの芽吹きはいつもよりも早かった。4 月に寒波が降り、ル・ブリゾーなど一部霜の被害があったが、その他の区画はほとんど影響がなかった。その後は、ほとんど雨の降らない日照りが続いた。幸い、前半は冬に降った雨の貯蓄のおかげでブドウは問題なく成長を続けた。だが、7 月に入ると日照りに加え猛暑が続いたため、次第にブドウは水不足のストレスを抱えるようになった。8 月も水不足は続いたが、7 月ほどの暑さはなかった。8 月中旬に少量だが恵みの雨が降ったことによりブドウは一気に潤いを取り戻した。9 月の収穫直前にパタポンのピノドニスとル・ブリゾーのシュナンが鳥や鹿による害獣の被害があり、ル・ブリゾーはほぼ全滅、パタポンも一部収量が減ったが、それでも全体的には厳しい天候にもかかわらず満足の行く収量を確保できた。

「ヨシ」のつ・ぶ・や・き

現在ブリゾーの畑は Esca (エスカ) と呼ばれるブドウの木を枯らす病気に悩まされている。

これはエスカに侵されたピノドニスのブドウの木の写真。(写真①) この年は全畑を合わせて、何と目視だけですでに 30 本を超える木の感染が確認されているというから驚きだ。



(写真①) エスカの病気にかかったピノドニス



(写真②↑) ル・ブリゾーのシュナンの畑 (写真③↓) パタポンのラ・シャペルの畑



エスカとはカビ（真菌類）の一種で、ブドウの木の傷口から侵入し、幹の中心部を海綿状の物質に変え壊死させる病気だ。かつてはエスカ唯一の特効薬としてフランスでは亜ヒ酸ナトリウムが散布されていた。だが、亜ヒ酸ナトリウムが人体に有毒と認められると2001年から散布が全面禁止となった。それ以降、エスカに有効なはっきりとした手立てが今のところ見つかっていないため、現代のフィロキセラとも喩えられている。

ナタリーが言うには、今エスカの蔓延が顕著に見られるのはシュナンの「ル・ブリゾー」(写真②)、そしてパタポンの一区画「ラ・シャペル」の畑だそうだ。(写真③) エスカ自体は今に始まったことではなく毎年被害はあったが、あったとしてもひとつの区画に数本くらいで、今までは確認できた時点で伐根し、周りへの感染拡大を防いでいた。だが、2023年は一気に爆発したように感染が拡大した。

このエスカの厄介なところは、どのように感染が広がるかまだはっきりと分かっていないこと。

ちなみに、エスカはブドウの木の傷口から侵入するため、剪定作業の時に感染しやすいと言われている。エスカに感染したブドウの木を知らずに剪定しまうと、その菌が剪定ハサミに付着し、次の無感染の木の剪定の際に移してしまう。剪定が感染菌を運ぶ主な原因となっているのではないかという説だ。「よく感染を防ぐには、樹液の循環が始まる時期、いわゆる『ブドウの涙』がしたたり落ちる時に剪定をすると良いと言われている。剪定の切り口に付着したエスカ菌が樹液できれいに流され感染を防ぐことができると言われるが、実際私たちが剪定する時期は毎年ブドウの涙が始まる3月からなので、剪定は今回広がった原因には当てはまらない」とナタリーは言う。彼女自身は剪定ではなく2021年の長雨がエスカ菌蔓延の温床を作ったのではないかと考えている。いずれにせよ30本以上がエスカによって枯れる現象は異常であり、そうでなくても収量が少ないブリゾーなので、そのまま放置するとそこにさらに追い打ちをかけることとなる。

とりあえず、ナタリーは感染拡大防止対策として感染したブドウの木は冬の間全て伐根する予定だ。その状態でひとまず様子を見て、今年もさらに感染が拡大するようであれば、最終手段として、ひどいところは区画ごと全て伐根することも考えているようだ。

(2023.8.23.ドメーヌ突撃訪問より)

※弊社HP「フォト・ギャラリー」より、カラーでサイズの大きい鮮明な写真をぜひご覧くださいませ